シリーズ「国土教育」

明治用水と日本のデンマーク

将来世代により良いインフラを残す

皆さんは北欧のデンマークという国をご存じでしょうか。同じく北欧にあるフィンランドとともに、毎年のように「世界で最も幸福な国」の第1位・第2位を競い合っている小国・デンマーク。今回はこのデンマークと日本の国土にまつわるお話しです。

内村鑑三と『後世への最大遺物』

内村鑑三（1861～1930年）は、札幌農学校（現在の北海道大学）時代、「Boys, be ambitious（少年よ、大志を抱け）」で有名なW・S・クラーク博士に感化されてキリスト教信者になり、その後、福音主義信仰と時事社会批判に基づく日本独自のいわゆる無教会主義を唱えたキリスト教思想家です。

明治・大正期のわが国を代表する識者で、『代表的日本人』の著者としても有名な内村は、国土教育・インフラ教育の教材に相応しい著書を幾つか遺していますが、『後世への最大遺物』と『デンマルク国の話』がその代表作と言えるでしょう。

『後世への最大遺物』は、1894（明治27）年7月に箱根で開催された夏期学校（全国キリスト信徒の修養会）で行われた講演をとりまとめたもので、講演の要旨は概ね次のような内容でした。

〈われわれが五十年の生命を托したこの美しい地球、この美しい国、このわれわれを育ててくれた山や河、われわれはこれに何も遺さずに死んでしまいたくない、何かこの世に記念物を遺して逝きたい、それならばわれわれは何をこの世に遺して逝こうか、金か、事業か、思想か、これいずれも遺すに価値あるものである、しかしこれは何人にも遺すことのできるものではない、またこれは本当の最大の遺物ではない、それならば何人にも遺すことのできる本当の最大遺物は何であるか、それは勇ましい高尚なる生涯である。〉

勇ましい高尚なる生涯、金、思想とあわせ、将来世代に遺すべき価値あるものとして（土木）事業、すなわちインフラ整備をあげていたのです。内村はこの時、価値のある事業として、箱根の山の下に隧道を掘って、芦ノ湖の水を沼津方面に流し、耕地を大きく増やす『箱根疎水』と、淀川の洪水を防ぐために、大阪の天保山を切り開いて、安治川をつくった『安治川開削』を取り上げていました。

明治用水頭首工と矢作川（豊田市室町）

超えた『国破れて山河あり』

『デンマルク国の話』は、ドイツ、オーストリアとの戦争に敗れてシュレスウィヒとホルスタインの2州を奪われたデンマークの復興を願う工兵士官ダルガスが、外に失った国土を内に求めようとする（荒漠の地ユトランドに植林を行う）苦心を描いたノンフィクションです。

ダルガスの苦心の結果、ユトランドの荒野には樅の木が繁り、木材が収穫できるようになったばかりか、気候自体が大きく変化して、良き田園となりました。ちなみに「2023年版世界幸福度報告」によると、デンマークはフィンランド（第1位）に次いで世界で2番目に幸福な国として評価されています。

この短編（講演録）で内村は「国の興亡は戦争の勝敗によりません、その民の平素の修養によります。善き宗教、善き道徳、善き精神ありて国は戦争に負けても衰えません」「富は大陸にもあります、島嶼にもあります。沃野にもあります、沙漠にもあります。善くこれを開発すれば小島も能く大陸に勝さるの産を産するのであります」「国の実力は軍隊ではありません、軍艦ではありません。はたまた金ではありません、銀ではありません、信仰であります」と三つの教訓を示しています。

明治用水で豊かな水が

内村の熱い思いを引き継ぎ、現代に生きる私たちの世代も国土に対して働きかけを続け、将来世代により良いインフラを遺していかなければなりません。ちなみに、この物語（伝記）は「デンマークの柱」というタイトルで、戦後の小学校国語教科書にも採録されていました。

内村が活躍した時代（晩年の大正時代末期から昭和初期にかけて）、わが国に「日本丁抹（デンマーク）」と呼ばれる地域が生まれていました。愛知県碧海郡一帯（安城を中心とした地域）のことで、明治時代に完成した農業用水路「明治用水」によって豊かな水が確保され、農業経営の多角化、教育・指導機関の充実、組合組織の発達などを背景とした先進的な農業が実践されていました。

当時、農業先進国だったデンマークになぞらえ、「日本デンマーク」と呼ばれていたのです。安城市では現在も米や麦、大豆をはじめ施設野菜、露地野菜、果樹、花卉、畜産など多岐にわたる農畜産物が生産されています。

江戸時代以前、碧海郡一帯は農業用水を溜池に頼るほかない枯れた土地柄でしたが、文化・文政期に豪農であった都築弥厚（1765～1833年）が発案・測量した用水路計画のもと、その意志を岡本兵松（1821～1903年）や伊豫田与八郎（1822～95年）が受け継ぎ、さらに多くの人々の協力があって、明治用水は1880（明治13）年にようやく完成しました。

実現にあたっては、水害の発生や「入会地」の減少を恐れた地元農民たちの激しい抵抗があり、巨額の資金確保などの課題を克服しなければなりませんでしたが、民間の着想と資金調達によってこの歴史的大事業（インフラ整備）は成し遂げられたのです。

矢作川を水源とする明治用水は現在、安城市を中心に豊田、知立、刈谷、高浜、碧南、西尾、岡崎の西三河地域8市に水（農業用水、工業用水、上水道水）を供給、約7000㌶の耕地を潤しています。また、農林水産省の疏水百選や国際かんがい排水委員会（ICID）の世界かんがい施設遺産にも認定されています。

ふれあい田んぼアート安城（安城市和泉町）

（国土学アナリスト　森田康夫）